

く め だ い け ぬ し
久米田池の主とよ (田治米町)
た じ め ち ょ う

むかしむかし、今から千三百年ほどむかしの話です。

今の久米田池のあたりは、草のはえた湿地帯や大木や雑草が生い茂る荒れ地でした。なんとかして、田や畑にして、たくさんの穀物（米やあわなど）が、とれるようにしたいものだ、村人たちは考えていました。しかし、田や畑を作っても、水がなくては、作物が育ちません。ところが、水を引いてくる川も遠く、池を掘るにはたくさんのお金がいるのです。村人たちは困りきっていました。

そんなとき、聖武天皇が僧行基に命じて、この地に大きな池を掘らせることになったのです。村人たちは、大喜びで人夫を出し、早速工事にとりかかりました。和泉の国のあちこちから、池を掘るための人々が

集められ、毎日、土を掘り、石を運び、池の土手を固め、危険を伴う力仕事に励みました。けれど、この大勢の人夫たちの、お茶の用意や食事の用意をする女が、なかなか見つかりませんでした。

そこで、人夫たちに尋ねると、

「とよさんが、ええなあ。」

「とよさんが、飯つくって

くれたら、仕事がえろうて

も頑張れるわい。」

と、皆が言うのでした。

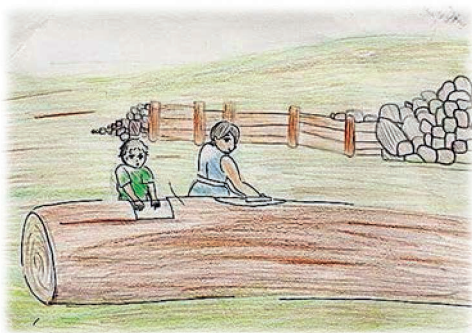
この「とよ」というのは、田治米村の与兵衛という、村でも指折りの大金持ちの娘で、このあたりでは、評判の美しく、氣だてのよい、やさしい娘でした。行基がとよに理由を話し頼むと、とよは、



「村のためになることでしたら。」

と、快く引き受けました。とよは、その日から大勢の人夫たちのお茶、食事の用意をしました。

朝は、日の出前から湯を沸かしご飯を炊き、夜は星の光をたよりに家へ帰るとい
う日々でした。とよの苦勞は、
なみたいていではありません
でしたが、とよのおかげで、
人夫たちは、きつい力仕事に
励むことができました。



それから十四年、多くの人々の努力のかいあって、
ついに久米田池ができあがったのです。池は水を満々
とたたえ、昼には水鳥が羽を休め、夜には月が池に姿
を映し、村々の田や畑に待ちに待った水が流れて行き
ました。

とよは、十四年の長い歳月を思い返しました。ただ

ただ村のため、この荒れ地が田や畑になり、村が潤う
ことだけを願い働きつづけてきました。しかし、十四
年は、あまりにも長く、池が完成した今、この先どう
したらよいのか、思案する ときでした。

そんなおり、行基は、朝から晩まで働き続けてくれ
たとよに、感謝して、

「とよ、お前は本当によく頑張ってくれた。この池を
掘る間、毎日お茶や食事の用意を続けてくれた。こ
の池ができたのも、お前の働きがあってこそじゃ。
何かお礼がしたい。望みのものを、なんなりと言っ
てくだされ。」

と、聞いたのです。とよは、

「私は望みのものは何もございません。」
と断ったのですが、行基が、二度三度と尋ねてくれる
ので、

「それでは、私にこの久米田池をくださいませ。私は、久米田池の主となって、後の世まで、この池を守って参ります。」

と言うや否や、強く頭を振ったかと思うと、たちまち黒髪が乱れ、見る見るうちに、口は耳元までさけ、目は爛々と輝き、からだには、うろこのような物が現れ、大蛇となって、水を満々とたたえた久米田池の底深く消えて行ってしまいました。後には、大きな波紋だけがゆっくりと広がっていきました。行基とそばにいた村人たちは、突然のできごとに驚いたことは、言うまでもありません。

それから村は勿論、近くの村でも、とよのことが話題になりました。

「とよは、命をかけて久米田池の主になったんや。」

「池の神様に誘われて、命をとられたんじゃ。」

とか、うわさはうわさを生みました。

それから、不思議なことに、四方の池の水が涸れても、久米田池の水は、涸れることなく、多くの村々の田や畑に、水を潤しています。

とよは、村人たちの大切な池を、大蛇となって守り続けているのです。

